

特集・タイ法式による得度式

わが国最初のタイ仏教ウ・パサン・パタ

駒沢女子短期大学学監 教授 東 隆 眞

1

昭和六十三年（タイ国仏教暦一五三一年。タイ国では、国暦と仏教暦とは同じ）四月一日、神奈川県横浜市、曹洞宗・善光寺で、日本で初めてタイ仏教のウ・パサン・パタ（得度式）が、とりおこなわれた。

誼をえている。

今回もお招きにあずかったので、友人の一人として、よろこんで参列し、その厳肅な儀礼に、深い感動をおぼえた。

2

黒田武志師は、同窓の石附周行師（群馬県雙林寺住職。日本パクナム会会长）とともに、駒沢大学、同大学院を修了するや、曹洞宗両大本

善光寺住職黒田武志（大圓）老師は、筆者の大学、大学院時代の同窓で、爾来、今まで交



山（永平寺、総持寺）の特別僧堂に安居し、さらには、揃つて、タイ国の名刹ワット・パクナム（バンコク中心街より南西の郊外、トンブリ地区にある。瞑想人カマタン／修行の寺院として知られる。タイ仏教マハニ派に属する）の僧院で、得度をうけ、テーラヴァーダの比丘として、修行した。今を去る二十余年まえ、昭和四十一年のことである。

この仏縁は、十数年後、念願の「善光寺海外留学僧派遣育英会」（理事長、黒田師）発足となつて新たな実を結び、今日に至つている。留学僧とは言いながら、女性の在家信者もいる。性别、年齢、国籍、宗派を問わない。ただ問うのは、なによりも熱烈な求道心である。いま、日本人、中国人、韓国人の留学僧が、アメリカ、インド、スリランカ、中国、日本で勉学にいそしんでいる。もちろん、タイ国のワット・パクナムにも派遣されている。善光寺一カ寺でこれ



を行うのであるから、驚嘆するほかない。

さて、このたびのタイ仏教のウ・パ・サン・パ・タ（得度式）について、なぜ、あえて、ここに記すのか。

ワット・パクナムのご住職、プラ・タム・パンヤー・ボディ老師を戒師とし、同副住職、プラ・パーウナ・コーソン・テーラ老師（父君は日本人、母君はタイ人。タイの高僧のなかで、ただ一人の日本語に堪能なお方という）を教授師として善光寺にお招きし、善光寺釈迦殿で内外関係者各位の隨善をえて、黒田師のご子息四名（武徳君、高一。泰志君、中二。博志君、中一。賢志君、小三）の得度式が行われたからである。

また、得度式に先だって、ワット・パクナムより下賜された金色まばゆい等身大の釈迦牟尼仏坐像の開眼式が、タイ国高僧のご臨席を仰いで、曹洞宗大本山總持寺監院、斎藤信義老師の

導師のもと、おごそかに修行された。

この釈迦牟尼仏開眼式、タイ仏教ウ・パサン・パタには、中村元博士（東大名誉教授、東方学院長）、藤吉慈海大僧正（浄土宗光明寺法主）、藤井真水大僧正（真言宗増徳院住職）、矢萩信顯（前

上座部得度による僧名

Takenori Kuroda(黒田武徳)

昭和46年7月23日生(1971.7.23) Friday

スッテ パティ 精進し清い精神をもった人

Yasushi Kuroda(黒田泰志)

昭和49年7月25日生(1974.7.25) Thursday

パンヤー パッティ 智恵においてすぐれた人

Hiroshi Kuroda(黒田博志)

昭和51年2月18日生(1976.2.18) Wednesday

ターナ パッティ 仕事においてすぐれた人

Kenzi Kuroda(黒田賢志)

昭和54年12月25日(1979.12.25) Tuesday

ヤーナ パッティ 知識においてすぐれた人

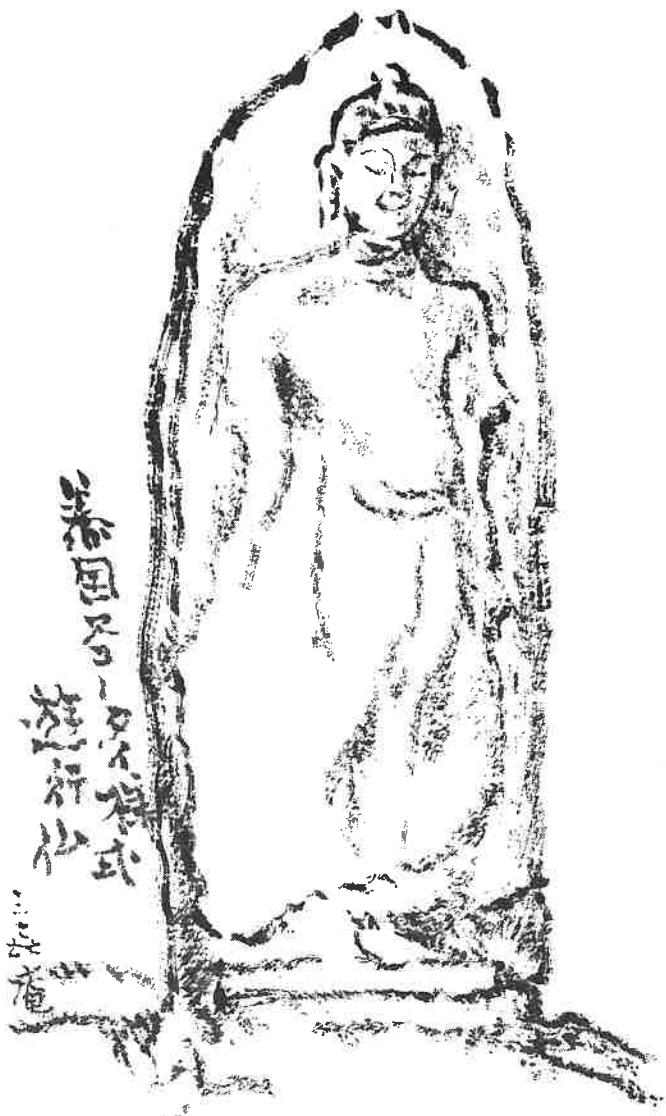
全日本仏教会事務総長)、奈良康明博士(駒沢大学前副学長)、宮林昭彦教授(大正大学、浄土宗大光院住職)、鈴木格禪教授(駒沢大学)、宮本延雄先生(鶴見大学事務局長)など、宗門の内外、学界の第一級の諸先生が参集された。未曾有の盛儀というべきであろう。

はじめてまのあたりにするウ・パサン・パタから受けた感激は、みなひとしく一様であつたとおもう。

その詳細については、べつに新聞、雑誌がとりあげるであろうから、ここでは触れないでおく。

3

知られるとおり、仏教が仏教として成り立つには、いつの時代、どの地域であろうと、宗派のいかんを問わず、戒、定、慧の三學が、どのようなかたちにせよ、学習されてきている。



戒学によつて、生活にきまりをつけ、定學によつて、からだとこころをととのえ、慧學によつて智慧と慈悲を身につけるのである。しかも、この三學は、それぞれ深く結びついており、ど

れかを重点的に学ぶことはあるとしても、切り離して考えることはできない。

わが国では、戒（個人的な生活のきまり）は、律（集團生活のきまり）と一緒にるものとしてう

けとめられ、戒律とよんでいる。

戒律を宗とする宗派は、戒律宗、律宗、南山律宗という。

律宗は、中国、唐代のはじめ、南山大師道宣律師によつて開始された。

道宣律師の孫弟子、艦真和上は、天平勝宝六年（七五四）わが国に渡來し、奈良、東大寺に戒壇院を建て、日本僧に授戒した。天平宝字三年（七五九）、唐招提寺を開き、ここで入寂した。いま、唐招提寺は、律宗の總本山となつてゐる。艦真和上以前に、いわゆる小乗の律が中国からもたらされた。

艦真和上が伝えた戒は、梵網經を中心思想とする大乘菩薩戒であつたらしい。大小乗戒や具足戒も授けてゐる。

艦真和上が、北伝仏教の本場、中国から日本に上陸して、日本人に授戒したことは、画期的なことがらとされている。

その後、平安時代、空海や最澄をはじめ、鎌倉時代には、榮西、道元、俊芻らも、中国へ留学して、戒律を学んだ。

鎌倉時代のあと、室町時代、安土桃山時代、江戸時代、そして明治、大正、昭和と、おびただしい数の日本僧が、海外の仏教国に出かけ、戒律を授かつて帰国した。

これらは、例外もなく、日本人が、インド、チベット、スリランカ、タイ、ビルマ、中国、朝鮮半島などに赴いて、彼の地の僧院で、彼の地の戒律を受け、修行したのであつた。

しかし、彼の地から日本にやつて来て、日本人に本格的な戒を授け、以後、その影響のもつとも大きく長いのは、くりかえすが、艦真和上をあげるべきであろう。

本の善光寺にお出ましになり、三帰戒、十戒を中心とする正規の沙弥戒をお授けになつた得度式が行われたのは、まさに鑑真和尚以来の聖なる出来ごとである。

なかなかんずく、タイ国テーラヴァーダのウ・パ・サンパタが日本で挙行されたのは、わが国最初の盛儀である。タイ仏教としては、実に、二五三一年ぶりのことである。



来賓の中村元博士も、ご挨拶のなかで、この点をとくに強調された。

それゆえ、昭和六十三年四月二日（午後二時より午後三時半）は、日本佛教史に書き加えられる新しい一頁である。

わたくしども日本の佛教徒は、ワット・パクナムの深いお慈悲に、くりかえしくりかえし感謝のまことをささげなければならない。

得度をうけるにあたつて、黒田師の四人のご子息は、半年以上もまえから、からだとこころの準備をすすめてきたという。

遊び盛りのはずである少年たちが、かなり長いパーリ文のおとなえごとをことごとく暗誦しているのを聞きながら、学校教育にたずさわっている筆者は、真に感嘆したことであつた。

中村先生は、このパーリ文が、このように日本のお寺でとなえられていることこそ、佛教の国際交流につながるとおつしやつた。



黒田師、同夫人の熱い願心にあらためて敬意を表するとともに、四人の新しい仏弟子たちの前途を祝福してやまない。

いまや、わが国の各方面で、さまざまな国際化が叫ばれている。仏教界も例外ではない。

しかし、宗派本位の日本仏教は、存外、海外の仏教を知らない。知つても、積極的に交流し、理解し、実践して、世界の平和に資することをしない。しているという声もあろうが、まだまだ広く一般化していない。

また、日本仏教は、破戒なし無戒の仏教といわれる。これは日本人の民族性によるところがあるのかも知れない。持戒は、なかなか定着しないのである。戒を信仰とし、神聖視する南方仏教から日本の仏教は、非難され、嘲笑されて久しい。

戒とは、なにか。仏教とは、なにか。出家を中核としながら在家化してしまっている現実の

既成仏教教団では、僧侶のあり方が、その根底から問われているといえよう。

黒田師は、このたびのタイ仏教ウパサンパタは、きわめてプライベートなことに属することだから、できるだけ内輪で済せたいと話していた。

たしかに、プライベートなことといえば、そうちも知らない。しかし、その歴史的、客観的意義は、大きい。

あれを思い、これを思うと、今回の得度式が投じた一石は、私の胸にも大きな波紋となつてひろがつてゆく。あえて、一文を草するゆえんである。